

重度知的障害者支援における利用者理解の構造とプロセスについて

ー障害者支援施設の生活支援員を対象にー

○ 社会福祉法人堺あすなろ会 野前 宜史 (010456)

笠原 幸子 (四天王寺大学・002556)、西尾 祐佳 (四天王寺大学大学院博士前期課程・010454)

キーワード3つ：利用者理解 重度知的障害者支援 生活支援員

1. 研究目的

現在、重度知的障害者が入所する障害者支援施設においては、強度行動障害への対応の難しさ、障害者福祉施設従事者等による障害者虐待が深刻な社会問題となっている。筆者は、障害者支援施設に勤務する生活支援員であり、支援経験を通して、これらの原因の一つとして、「支援者の利用者理解」が大きく関係しているのではないかと漠然と考えてきた。

本研究では、障害者支援施設の生活支援員を対象にして、「支援者が重度知的障害の利用者理解を深める過程にはどういう構造がありどういうプロセスを辿るのか」、「支援者が重度知的障害の利用者を理解するとはどういうことなのか」について明らかにすることで、重度知的障害者の強度行動障害支援に資することを目的としている。

2. 研究の視点および方法

支援者の利用者理解に注目するのは、私たちが他者を理解しようとする際に、つまるところ、「分かるか、分からないか」が最も重要だからである。従来から、ケア、人間関係、共感、傾聴、受容などの重要性が説かれてきたが、これらは、人を理解するための重要な要素ではあっても、「他者の理解」という全体の、あくまでも一部分でしかない。本研究では、全体とは部分の総和以上のものであるという考えのもと、このような全体としての利用者理解に焦点をあてた。また、本研究では、重度知的障害者支援に注目している。数ある対人援助職のクライアントのなかでも重度知的障害者は、それぞれの障害特性は千差万別であり、言葉によるコミュニケーションの難しさが根本にあることから、支援者の利用者理解が格別に困難な支援対象者であると言える。その意味で、重度知的障害者支援を対象にすることは、対人援助職全般の利用者理解を促進する上においても、有益な示唆を与え得るものと考えた。

本研究では、障害者支援施設の生活支援員 10 名を対象にインタビュー調査を実施した（2024 年 2 月～5 月）。分析方法は、M-GTA を採用した。予め自身が担当した成功事例（強度行動障害が軽減した）を準備していただき、インタビューガイドは、「支援事例のプロセスについて、支援者と利用者との関わりやその変化についてお話し下さい」とした。

3. 倫理的配慮

調査実施にあたっては、調査対象者へ調査項目を口頭と文書をもって説明し、データは個人のプライバシーの保護に十分配慮し、匿名性が確保されること、面接に際しては、語りたくないことは語らなくてもよいこと等を確認し、録音することを了承のうえ、同意書を取り交わした。なお、本研究は、四天王寺大学研究倫理審査委員会の承認（IBU 2023 倫

第32号)を得ている。また、申告すべき利益相反(COI)はありません。

4. 研究結果

分析の結果、カテゴリー構成表(表1)に示す、52の概念に支持される16の下位カテゴリー、2つの中位カテゴリー、5つの上位カテゴリーを確定した。

表1 カテゴリー構成表

上位カテゴリー	中位カテゴリー	下位カテゴリー
1.【絶対的なわからなさ】		1.1 〈重度知的障害と独特な障害特性〉
		1.2 〈利用者理解の難しさ〉
2.【個別支援プロセス】	2.1《個別支援の始まり》	2.1.1 〈手探りの支援の始まり〉
		2.1.2 〈知識と経験の不足〉
	2.2《ケア支援プロセス》 (コア・カテゴリー)	2.2.1 〈支援の原動力〉
		2.2.2 〈共感的理解〉
		2.2.3 〈諦めない試行錯誤〉
		2.2.4 〈知識と経験の両輪〉
		2.2.5 〈思いがけない支援の成功と発見〉
3.【担当利用者と担当支援者との一対一の関係性】		3.1 〈お互いに対する不信感〉
		3.2 〈お互いに対する信頼感〉
4.【チーム支援プロセス】		4.1 〈チームで支援する〉
		4.2 〈チームによるサポート〉
		4.3 〈担当利用者についての成功と発見を共有する〉
5.【利用者理解の方へ】		5.1 〈支援の好循環〉
		5.2 〈支援者の成長〉

5. 考察

障害者支援施設の生活支援員を対象にした、重度知的障害者支援における利用者理解の構造とプロセスでは、支援者の利用者理解は、①支援プロセスと不可分であるということ、②【担当利用者と担当支援者との一対一の関係性】に基づいた【個別支援プロセス】、特に《ケア支援プロセス》と密接な関係があるということ、③利用者に対する興味、知りたいという〈支援の原動力〉が起点となり、〈共感的理解〉〈諦めない試行錯誤〉〈知識と経験の両輪〉というプロセスが生まれ、〈思いがけない支援の成功と発見〉へと繋がっているということ、④《ケア支援プロセス》が【担当利用者と担当支援者との一対一の関係性】に変化を生み出しているということ、⑤障害者支援施設では【チーム支援プロセス】が不可欠であるということ、⑥このような支援プロセスを経て、当初の【絶対的なわからなさ】は、徐々に【利用者理解の方へ】の進展が実感されていくということが指摘できる。